



シリーズ：帰国生大学入試（2） 受験・出願に向けての準備

INFOE（海外子女教育情報センター） 代表
松本 輝彦

海外の高校の卒業生を対象とした、日本の大学の特別選抜制度である「帰国生大学入試」について、入試の目的から実際の受験準備、そして受験までの詳細な情報を、シリーズでお届けいたします。

前回は、受入れ大学のねらいと受験資格について述べました。今回は、現地校在学中にできる受験準備について考えてみましょう。

現地高校での授業と卒業

高校卒業資格

帰国生入試の受験資格の第一は、アメリカの場合、現地の高校の卒業資格です。

卒業に必要な条件は、州・学校区・高校によって異なりますので、学校からの配布物やカウンセラーで確認してください。一般的には、受講科目（必修・選択）と取得単位数、学業成績（GPA）の最低基準などが条件になっています。また、高校卒業試験の合格を条件とする州も増えてきました。

基本的には必要な卒業単位を取得すればよいので、12年生修了より早く、例えば11年生を終えた時点で卒業資格を取得する「繰り上げ卒業（早卒・Early graduation）」を認めてくれる学校区・学校があります。現地校の学年が半年遅くなっている場合や保護者の帰国時期の予定で、通常の卒業まで待てない場合などに利用します。

受講クラス

卒業のためにはもちろんですが、帰国生入試受験や大学入学後の学業のために、高校での受講科目に注意が必要です。

文系学部の場合、帰国生入試の試験科目は、小論文・面接がほとんどの大学で、時には、国語（日本語）や英語の筆記試験を科す大学があります。さらに、受験する学部や学科特有の試験を受けなければならない場合も稀にあります。

例えば、経済学部に出願するのであれば、当然、現地校のEconomicsをしっかりと勉強しておくことです。本気で勉強したいことを、面接でアピールするためにも大切です。

理系の学部では、学科（専門）別の募集が一般的です。入学試験では、文系の科目に加えて、それぞれの学科で必要な科目の基礎的学力を筆記試験や口頭試問で判定します。

共通するのは数学ですが、数学科ではよりレベルの高い数学、機械工学科では物理、医学部では生物など、各学科に必須な知識や理解を試験する大学があります。学科による試験科目や内容の事前の調べが大切です。

理系科目の筆記試験の受験準備のためにも、現地校でのCalculus・Physics・Chemistry・Biologyの理数系科目を履修し、しっかり勉強してください。できればAP試験にもチャレンジしてください。

また、これらのクラスの受講と並行して、その科目の日本語の参考書で、少なくとも基本用語の日本語訳を確認しておく、高校在学中の受験準備はOKです。

統一試験

提出が必要か？

最初に、志望する大学・学部が統一試験（TOEFL・SAT・ACT）の提出を義務付けているかどうかを確認してください。

どうしても提出が必要なのは、一部の大学しかありません。出願条件としてこれらの試験の最低点を設けている大学もあります。その一方で、「提出が望ましい」とする大学もあります。

必要に応じて、統一試験の受験準備をしてください。単なる噂や進学塾の勧誘だけに、振り回されないように。

TOEFL

アメリカの大学の学業についていける英語力を評価する、外国人のための試験です。世界中で受験できるので、その得点は大学生レベルの英語力評価のために幅広く用いられています。

帰国生入試でも英語力の判定に用いたり、出願の最低基準や筆記試験の代わりに使用する大学があります。

11年生の始めまでに一度は受験し、自分自身の英語力を客観的に点数で把握しておくことを勧めます。

SAT・ACT

アメリカのほとんどの4年制大学が、どちらかの試験結果を、出願時に要求する試験です。これまではSATが全米で一般